

Society5.0 時代における教師の力量形成に資する授業科目群の開発

Development of Lessons to Support Teachers' Professional Development in Society 5.0

兵庫教育大学 奥村好美, 伊藤博之, 別惣淳二, 松本伸示, 溝邊和成, 宮田佳緒里, 山中一英,
東京学芸大学 渡辺貴裕,

Marnix Academie ヘンク・ロフテンベルグ

OKUMURA Yoshimi, ITO Hiroyuki, BESSO Junji, MATSUMOTO Shinji, MIZOBE Kazushige, MIYATA Kaori,
YAMANAKA Kazuhide, WATANABE Takahiro, LOGTENBERG Henk

本研究は、兵庫教育大学大学院学校臨床科学コースの専門科目の一部として Society5.0 時代における教師の力量形成に資する授業科目群を開発することを目的としている。ここで授業科目群とするのは、Society5.0 時代に求められるような力量を育成するためには、個々の授業それぞれで取り組むだけではなく、複数の授業科目を連携させて包括的視点で育成していくことが有効であると考えられるためである。研究の流れとしては、まず既存の4つの授業科目「学習指導と授業デザイン」「教師発達とメンタリング」「授業研究の理論と実践」「学校カリキュラムのデザインと評価」を授業科目群として位置づけ直し、それらの授業科目の関連を、院生に育てたい力量という視点で整理した。その上で、実際に授業を実施するとともに、東京学芸大学の教職大学院と交流を行ったり、オランダの教師教育機関のロフテンベルグから助言を受けたりして、それぞれの授業科目の成果と課題を見出した。その結果、4つの授業科目からなる科目群を開発することができた。また、それらの授業科目の中で、兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会を提案することができた。さらに、それらの成果を日蘭同時開催の webinar を通じて国際的に発信することができた。

キーワード：教師教育、省察、ALACT モデル、模擬授業

Keywords: Teacher Education, Reflection, ALACT model, Mock Lessons

1. はじめに

本研究は、兵庫教育大学大学院学校臨床科学コースの専門科目の一部として、Society5.0時代における教師の力量形成に資する授業科目群を開発するものである。

Society5.0とは、2016年1月22日に閣議決定された「第5期科学技術基本計画」で提唱された、新たな科学技術が牽引する来たるべき次の時代の社会像である（日立東大ラボ編，2018）。狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く、新たな社会を指し、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会とされている。

教師に求められる資質能力については、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（2015年12月21日）等において、繰り返し提言されている。例としては、使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力などが挙げられてきた。さらに、変化の激しい社会を生き抜いていける人材を育成していくために、教員が自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化やキャリアステージに応じて求められる資質能力を、生涯にわたって高めていくことのできる力も必要であると考えられている。

Society 5.0時代の教師の力量形成に関しては、2020年7月17日に取りまとめられた「教員養成部会審議まとめ」において、上記のような資質能力に加えて、教師のICT活用指導力の向上などが強調されている。そこでは、Society 5.0時代の到来や学校現場におけるICT環境の整備が進んだとしても、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を進めていくことや、児童の学習状況の把握をふまえるなどして児童生徒の学習改善につなげるといった教師としての基本的な役割が変わるものではないとしながらも、インターネットを活用し主体的に調べ発表する活動や、遠隔地にいる児童生徒や専門家と議論する活動が可能となるなど、ICT環境の整備は児童生徒に対してより良い教育的効果をもたらさうことから、それらを活用した指導力の向上が重要であるとされている。また、「教員

養成部会審議まとめ」では、学校がより多様な知識・経験を持つ人材との連携を強化し、さらに当該人材を組織内に取り入れることにより、社会のニーズに対応しつつ、高い教育力を持つ組織となることが必要であるといった言及もある。こうした連携を実現できるようになるためには、教師にも多様な他者と協働する力が必要であると考えられる。

一方で、近年の教育政策に関しては、教育について必ずしも専門的知見をもたない人たちの教育論が、教育専門家の見解を経由せずに、それ以上の声の大きさをもって、教育政策や教育実践に影響を与えており、先人の蓄積に目を向けず、日本固有の教育文化を崩してしまうことが危惧されるという指摘もある（石井編著，2021）。

これらのことを踏まえつつ、本研究では、Society5.0時代における教師の力量形成に関して、自らの取り組みを省察し学び続ける力を基盤としつつ、これまでの理論的・実践的蓄積に基づき長期的・多角的な視点を持って教育活動を設計・実践・省察・改善する力を育成するとともに、教師自ら他者と協働的に知を作ったり、ICTを活用して多様な他者とつながり協働的に学びを深めたりする力を経験的に獲得させることが重要であると考えた。それにより、先人の蓄積から学びつつ、ICTの特質を批判的に検討しつつ活用するなどしながら新たな教育活動を教師たちが協働的に切り開いていけるようになると思われる。こうした力量を育成するためには、個々の授業それぞれで取り組むだけではなく、複数の授業科目を連携させて包括的視点で育成していくことが求められよう。

教職大学院における教師の力量形成については、これまでも多くの教職大学院で工夫を凝らした科目が開講されている。特に、学び続ける力の核となると思われる省察に関しては、東京学芸大学教職大学院の渡辺貴裕らが「カリキュラムデザイン・授業研究」の科目群（同Ⅰ～Ⅴ：旧名称「カリキュラムデザイン・授業研究演習」）で実施している対話型模擬授業検討会が近年注目されている。本研究はこうした取り組みに学びつつ、Society 5.0時代の教師に求められる力をより総合的に育成するため、独自の授業科目群を開発することを目的とする。

2. 研究の流れ

研究の流れとしては、まず、4つの授業科目からなる科目群の関連を院生に育てたい力量の視点で整理した。それを図に示したものが図1である。図1に基づいて以下のような研究を進めることで、各授業の成果と課題を見出し、最終的に独自の授業科目群を開発したい。

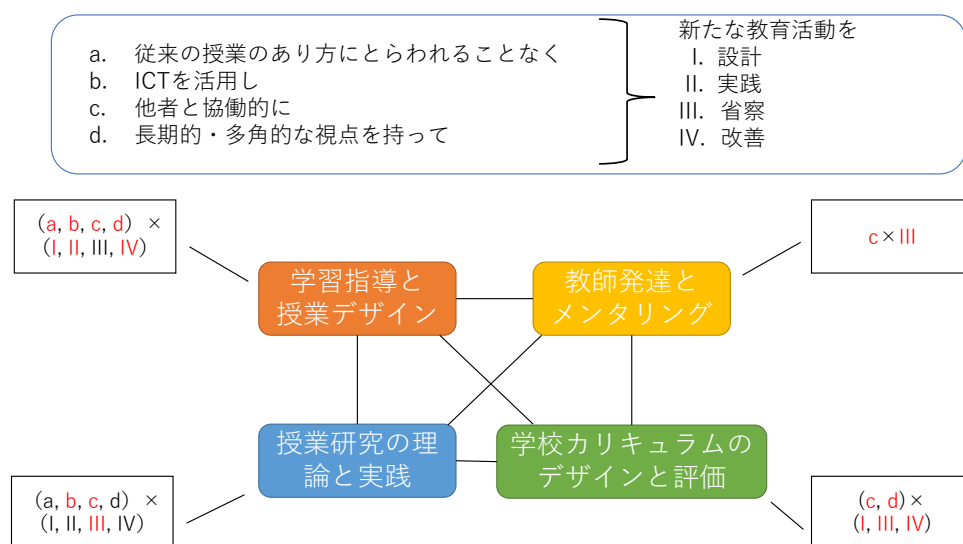


図1 授業科目群案
 (*赤字は特に重点的に取り組む事項)

具体的には、前期においては、兵庫教育大学大学院学校臨床科学コースの科目「学習指導と授業デザイン」（担当：宮田，松本，溝邊），「教師発達とメンタリング」（担当：宮田，別惣）を軸にする。

「学習指導と授業デザイン」では、授業や単元の設計の仕方を学べるようにするとともに、それを生かして模擬授業や省察・改善を行う場を設ける。その際、東京学芸大学の取り組みに学びつつ、授業の流れなどに踏み込んで省察ができるようアレンジした兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会を、模擬授業後の検討会に取り入れる。「教師発達とメンタリング」では、現職院生と学卒院生がそれらのプロセスに関わる際の協働のあり方を学べるようにする。これらの授業ではICTを活用（クラウドへのデータの蓄積）した授業ポートフォリオを作成し、学びの履歴を蓄積する。こうした取り組みを進めるとともに、ICTを活用（ネットワークによる遠隔通信）して、東京学芸大学の授業見学を教員・院生ともにオンラインで行い、授業科目群の開発につなげる。前期の授業後には、東京学芸大学とのオンラインでの院生交流会を行ったり、授業動画をオランダ在住のロフテンベルグらに送り、助言を受けたりして、これを後期の授業科目改善につなげる。

後期では、兵庫教育大学大学院学校臨床科学コースの科目「授業研究の理論と実践」（担当：奥村、伊藤、松本、溝邊）、「学校カリキュラムのデザインと評価」（担当：伊藤、奥村）を軸にすえる。「授業研究の理論と実践」では、授業研究や省察の理論をより深く学び、兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会のさらなる改善を行う。「学校カリキュラムのデザインと評価」では、他の3科目の連携が授業レベルに止まることから、カリキュラムレベルの設計や、そこでの取り組みを省察・改善するあり方をオランダなど海外の教育にも目を配りつつ、学べるようにする。これらの授業でもICTを活用して授業ポートフォリオを作成する。後期は、東京学芸大学の教員・院生にオンラインで授業見学に来てもらい、フィードバックを得る。最終的に、これら4つの科目の内容とその連携のあり方を見直し、新しい時代の教師に求められる力を総合的に育成する科目群を提案する。その成果は成果発表会で発表する。

3. 科目群開発に向けた取り組み

ここでは、授業科目「学習指導と授業デザイン」「教師発達とメンタリング」「授業研究の理論と実践」「学校カリキュラムのデザインと評価」それぞれの内容や科目群での位置付け、成果と課題を整理する。

(1) 学習指導と授業デザイン(前期:専門科目)

①授業の概要

授業のテーマ及び到達目標：授業実践の基盤となる教授学習過程についての教育学的知見、心理学的知見を学び、習得した理論や技能等を踏まえて授業をデザインできることを目標とする。共同で単元開発、本時案や教材の作成を行い、それを実践・検討することを通して、教育実践上の課題に対して優れた学習指導を創出できる実践力を培うことが期待される。

授業内容：本科目の重点事項として「a：従来の授業のあり方にとらわれることなく」「b：ICT活用」「c：他者と協働的に」「d：長期的・多角的な視点を持って」「Ⅰ 設計」「Ⅱ 実践」「Ⅳ 改善」を主なキーワードとして次のように授業内容を構成した（表1）。

表1 学習指導と授業デザインの授業内容と重点事項

回	授業内容	重点事項						
		a	b	c	d	I	II	IV
1	オリエンテーション： 15回の授業内容の概略と進め方、準備物等の説明を行う。グループ分けと、第2、3回の課題レポートの説明を行う。（Zoom）							
2・3	学習指導と発問・板書： 学習指導に欠かせない「発問」と「板書」に関する事例紹介や演習を通して、その意義・意味の理解を深める。（レポート）	○				○	○	
4	模擬授業の共同立案(1)： グループに分かれて、模擬授業遠隔化の方向性を決める。本時案を中心に、模擬授業のための学習指導案または教材作成計画を作る。（Zoom）	○	○	○		○		
5・6	対話型模擬授業検討会の進め方： 模擬授業の事後研の方法の一つである、対話型模擬授業検討会につ	○	○	○			○	○

	いて、資料を参照することにより、理解を深める。また、対話型模擬授業検討会の実践記録等を検討し、実践上の留意点を考察する。(Zoom)						
7	模擬授業の共同立案(2) : グループに分かれて、模擬授業のための本時案や教材を作成する。(Zoom)	○	○	○		○	
8・9	模擬授業の実践と授業カンファレンス(1) : 開発された本時案に基づく模擬授業または教材配信を行う。その後、模擬授業を振り返り、意見交換を行う。(Zoom)	○	○	○			○
10	学習指導案の改善案の作成(1) : 授業カンファレンスでの討議内容を踏まえ、グループで単元構成・展開に配慮した改善案を作成する。(Zoom)	○	○	○	○		○
11・12	模擬授業の実践と授業カンファレンス(2) : 改善された本時案に基づく模擬授業または教材配信を行う。その後、模擬授業を振り返り、意見交換を行う。(Zoom)	○	○	○			○
13・14	単元構成・展開の視点からの学習指導案検討 : グループの模擬授業や学習指導案全般について、単元構成・展開の視点から検討し意見交換を行う。(Zoom)	○	○	○	○		○
15	学習指導案の改善案の作成(2)・総括 : これまでの討議内容を基に、グループで学習指導案または、教材作成計画と教材の最終版を作成する。本講義全体の総括を行う。(Zoom)	○	○	○	○		○

事前事後学修: 受講生には、講義内容に関連する文献の熟読をはじめ、学習指導案を作成するための情報収集、学習指導案の作成、課題整理レポートの作成など、毎時間課題が要求される(授業時間外に毎回4時間程度)。

テキスト・参考書等:

- ・高垣マユミ『授業デザインの最前線―理論と実践をつなぐ知のコラボレーション』北大路書房, 2005年.
- ・河野義章編『わかる授業の科学的探究―授業研究法入門』図書文化, 2009年.

②成果と課題

オンラインによる新しい授業実践(ab×IⅡⅣ)の協働的な創出(d)

前期は、全学的に完全オンラインによる授業実践が求められたため、本科目もZoomミーティングによる同期型オンライン形式での実施となった。

共同立案や指導案検討などのグループワークは、グループごとにZoomのブレイクアウトルームに割り当てて実施された。資料や情報のやり取りは、Microsoft Teamsを用いて行った。Teamsにグループごとのチャンネルを設け、グループ内での資料共有はそのチャンネル内のフォルダを用いて行われた。受講者は、授業時間内だけでなく、課外でも自分たちでZoomミーティングを立ち上げて話し合いを重ねるなど、積極的な関与が見受けられた。

模擬授業は、Zoomのブレイクアウトルームか、新たにZoomミーティングを立ち上げて実施された。オンライン模擬授業の形態として、教材配信による非同期型の学習支援も選択肢として設けていたが、すべてのグループがZoomによる同期型の授業を実施した。模擬授業では、ブレイクアウトルームを利用したグループワークや、チャット機能を用いた発表のさせ方など、オンライン授業ならではの工夫が見られた。

模擬授業後の検討会では、Teamsのノート機能を用いて行われた。ノートに授業者が前もって授業の流れを書き込んでおき、検討会時に授業者役と学習者役が同時に考えを書き込んでいくことで、黒板への書き込みよりも円滑に意見交換が行われた。

新しい授業検討会(a×Ⅲ)の方法論の理解と実践

「対話型模擬授業検討会」(渡辺・岩瀬, 2017)に、昨年(2019)度の「授業研究の理論と実践」の受講者が工夫を加えた方式を「兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会」として、本科目の模擬授業検討会に取り入れた。

この方式を受講者に紹介するにあたり、昨年度の「授業研究の理論と実践」で明らかになった対話型模擬授業検討会を実施する上での課題として、次の4点を示した。すなわち、1. 振り返りを促す仕掛けである「8つの問い」の表(山辺, 2019)は、授業のどの時点の話題なのかを表現しにくい、2. 板書者が「行動(Do)・思考(Think)・感情(Feel)・望み(Want)」を即座に分類しにくい、3. ブレの発見まではいけるが、本質的な諸相に気づかずに、改善案の考察(ALACTモデルの第4局面「行為の選択肢の拡大」; コルトハーヘン, 2010)に向かってしまう、4. 現職院生たちの様々な実践例は、ストレート院生にも、他の現職院生にも有益(第4局面まで進みたい)。そのうえで、昨年度の「授業研究の理論と実践」での検討会の板書例を示した。また、web上に公開されている授業動画を学習者役になって各自が視聴し、視聴後に、視聴中のDTFWを書かせる演習を行った。

これらにより、受講者は検討会の流れを把握し、本番の模擬授業後の検討会では、初回からスムーズに実施することができていた。

単元構成・展開の視点からの指導案検討(d×Ⅳ)

模擬授業後の検討会では、本時の授業の検討に偏る傾向があるため、今年(2020)度は、単元構成や展開といった、より長期的な視点から学習指導案を検討する機会を別建てで設けた。受講者は、単元目標を整理し、なぜ本時でこの内容を押さえないといけないかを検討する中で、単元目標に照らした本時の位置づけをより明確に意識することができていた。こうした長期的に学習指導を検討する視点は、後期の「学校カリキュラムのデザインと評価」において、カリキュラムといったより長期的な視点へと拡張されていくことが期待される。

教科の目的・教材・授業者のねがいの検討の不十分さ

模擬授業後の検討会では、授業者と学習者のDTFWの発散が活発に行われ、それらの間のブレの発見やそのブレの背後にある本質的な問題についての議論も行われた。しかしながら、授業者が授業実践に込めたねがいまで十分に問われることはなかった。また、本時のねらいと教科の目標との整合性や、使用した教材の妥当性といった点からの検討もほとんど行われなかった。

そこで、今年度後期の「授業研究の理論と実践」において、模擬授業の実施前に、グループで模擬授業の事前研を行うとともに、教科教育の専門家に指導案を見ていただくことを課すことで、教科の目標や教材の検討を意識させることにした。授業者のねがいの掘り下げについては、今後も、継続的に検討していくこととした。

(2) 教師発達とメンタリング(前期: 専門科目)

① 授業の概要

授業のテーマ及び到達目標: 教育専門職としての資質・能力の形成と向上に関わる理論的知見に基づき、自らの職能発達を目指す教育実践者としてのあり方、それを支援するメンターとしての指導・助言のあり方を考察できるようになることを目標とする。また、校内におけるメンタリングの実践例の検討や模擬メンタリング等を通して、教師発達支援の実践的方法・技術の習得を目指す。この授業を通して、現職院生は若手教師等の実践的資質・能力を向上させるための支援に活用できるメンタリングの理論的知見と実践的方法・技術を獲得することが期待される。学卒院生は、自身の教職キャリアに対する見通しを持ち、将来的にメンタリングを受ける側・行う側に立った時に、効果的にメンタリング活動に取り組むための理論的知見と実践的方法を獲得することが期待される。

授業内容: 本科目の重点事項として「c: 他者と協働的に」「Ⅲ 省察」をキーワードとして次のように授業内容を構成した(表2)。

表2 教師発達とメンタリングの授業内容と重点事項

回	授業内容	重点事項	
		c	Ⅲ

1	教職の専門性基準と国際動向：別惣担当 高度な実践的指導力形成をめざす教員養成・研修の基準となるべき教職の専門性基準の成立過程とその理念・内容と運用のあり方を、欧米等の諸外国の実例を通して比較・検討しながら学ぶ。(Zoom)		
2	教師の意思決定、行為選択の特徴：別惣担当 教師の専門的資質・能力の一つである意思決定、行為選択に関する研究の成果に学びながら、教師の意思決定、行為選択の特徴を構造的、機能的に理解する。(Zoom)		
3	教師の意思決定、行為選択と知識基礎との関係：別惣担当 教師の専門的資質・能力の一つである意思決定、行為選択と知識基礎の関係に学びながら、教師の意思決定、行為選択の特徴を構造的、機能的に理解する。(Zoom)		
4	教師の意思決定、行為選択に関する事例分析：別惣担当 受講生の過去の教育実践上の意思決定の失敗事例を取り上げて、受講生相互に失敗事例を分析し、代替策の考案や問題解決に向けて改善案の作成に取り組む。(Zoom)		
5	反省的实践家としての教師の特徴と自律的な生涯発達：別惣担当 変化する諸状況のなかで、高度な教育実践を展開し、専門職として信頼される資質・能力を生涯にわたって維持・発展させるために、反省的实践家としての教師の特徴について考察する。(Zoom)	○	○
6	反省的实践家としての教師の学びとその促進：別惣担当 反省的实践家としての教師が活用する実践的知識とその獲得を促進する要件について理解する。次に、教育実習生の省察プロセスに注目したコルトハーヘンが考案した教師の専門家としての学びについて考察する。(Zoom)	○	○
7	教師の省察力を高める授業研究法：別惣担当 「授業リフレクション研究」を用いて、教師の実践的知識と省察力をいかに高めていくべきかを学び、それを支えるメンターの役割や組織的要因を考察する。(レポート)	○	○
8	教師のメンタリング：宮田担当 メンタリングの概要と学校内で行われるメンタリングの具体例を概観し、メンタリングに対する大まかなイメージを構築する。(Zoom)	○	○
9	初任教師の発達課題とメンタリング行動の特徴：宮田担当 初任教師の発達課題と、その課題に応じたメンタリング行動の特徴を学ぶ。また、初任教師を対象とした一対一のメンタリングを取り上げ、メンタリングを成功させるためのコミュニケーションのあり方を検討する。(Zoom)	○	○
10	異性間関係の複雑さと管理の方法：宮田担当 一対一のメンタリングにおいて生じがちな、異性間関係の複雑さを学ぶ。また、メンタリングに関わる複雑さを管理する手立てを考察する。(Zoom)	○	○
11	模擬メンタリングの実践1：宮田担当 模擬的に一対一のメンタリング活動に取り組むことにより、メンタリングの具体的な進め方を習得する。また、メンター、メンティそれぞれの立場から、本時のメンタリング活動をふり返り、改善案を考察する。(Zoom)	○	○
12	若手教師の発達課題とメンタリング：宮田担当 若手教師の発達課題と、その課題に応じたメンタリング行動の特徴を学ぶ。若手教師の経験の質を高めるための取り組みとして、グループメンタリングを取り上げ、その特徴や実践例を学び、効果的な運営方法について考察する。(Zoom)	○	○
13	中堅教師・熟練教師の発達課題とメンタリング：宮田担当 中堅教師の発達課題と熟練教師の発達課題に焦点を当て、その課題に応じたメンタリング行動の特徴を学ぶ。メンタリングの互惠的側面や、同僚の役割に基づき、メンタリングがメンターに及ぼす有効性を考察する。(Zoom)	○	○
14	模擬メンタリングの実践2：宮田担当	○	○

	これまでに習得した理論を踏まえて、改めて模擬メンタリングを行う。メンター、メンティそれぞれの立場から、メンタリング活動全体をふり返り、効果的なメンタリング行動のあり方を考察する。(課外活動)		
15	総括： 別惣・宮田 授業全体を振り返りながら、学んだ内容について各受講生が総括する。(レポート)		

事前事後学修：

- ・ 講義レジュメ、参考図書等の補助資料を事前に参照し、理解を深めること（授業外で毎回2時間程度、全30時間）。
- ・ 事後には、授業内容、及び補助資料を参照して、課題レポートの作成に取り組むこと（授業外で毎回2時間程度、全30時間）。

テキスト・参考書等：

- ・ 吉崎静夫『教師の意思決定と授業研究』ぎょうせい、1991年。
- ・ 佐藤学『教師というアポリアー反省的实践へ』世織書房、1997年。
- ・ F・コルトハーヘン編『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社、2010年。
- ・ 中原淳（監修）『教師の学びを科学する—データから見える若手の育成と熟達のモデル』北大路書房、2015年。
- ・ 横浜市教育委員会（編著）『教師力向上の鍵』時事通信社、2011年。
- ・ クラム、K、E（渡辺直登・伊藤知子訳）『メンタリング—会社の中の発達支援関係』白桃書房、2003年。

②成果と課題

成果

別惣が担当した教師発達の授業に関しては、その後のメンタリングの学修や、学校臨床科学コースの他の科目「学習指導と授業デザイン」「授業研究の理論と実践」の内容ともつながるように、コルトハーヘンのALACTモデルによる省察プロセスと、それを促す指導過程を授業内容に取り入れた点は院生の学びを深める意味で一定の成果があったと考えられる。また、コロナ禍によりZoomを用いたオンライン授業を実施したが、対面での授業とあまり変わりなく授業ができ、学生からの授業後の課題レポートの内容をみても対面の時と変わらない学びの成果が得られていた。

宮田が担当したメンタリングの授業では、7回全体を通して、メンタリング時のメンターやメンティの行動の在り方を繰り返し考察させた。その結果、模擬メンタリングでは、それまでの講義で学んだことを実践しようとする姿が見られた。また、授業後のふり返りにもメンターやメンティとしてどう振舞えばよいかの記述が多く見られた。ここでの学びが、「学習指導と授業デザイン」での共同立案や指導案検討、「学習指導と授業デザイン」「授業研究の理論と実践」における対話型模擬授業検討会での省察の場面で生かされることが期待される。

課題

その一方で、メンタリングの授業では、メンタリングの実践的な内容が主となり、理論的な内容が弱くなりがちであった。この点については、理論的内容を増やすとともに、前半の教師発達の授業とのさらなる連携を図っていきたい。

（3）授業研究の理論と実践（後期：専門科目）

①授業の概要

前期で行われた「学習指導と授業デザイン」「教師発達とメンタリング」の2科目履修学生を主たる対象として、以下のようにアクティブ・ラーニング実施科目として「授業テーマ及び到達目標」を設定した。

授業テーマ及び到達目標：児童・生徒の成長・発達をふまえ創造的な学力を保障する高度な授業実践を省察的・協働的に実施するために、授業研究の理論等に基づき、具体的に授業の創造（授業デザイン）、実施（授業実践）、検討（分析・評価）、改善を行うことができるような力を育成することを目標とする。また、これまでの授業研究会のあり方を振り返る。

授業内容：本科目の重点事項として、「b: ICT活用」「c: 他者と協働的に」「Ⅲ 省察」を主なキーワードとして次のように授業内容を構成した（表3）。なお、表3の内容は前期の取り組みや受講生のニーズ等をふまえ、元のシラバスに変更を加えて、実施した授業内容である。

表3 授業研究の理論と実践の授業内容と重点事項の対応

回	授業内容	重点事項		
		b	c	III
1	オリエンテーション：本授業の目的、期待される学習効果について説明すると共に15回分の授業の進め方について確認する。			
2	従来の授業研究の相対化：これまでの授業研究に関する経験を交流して、従来の模擬授業のメリット・デメリットを考える。		○	○
3～5	高度授業実践に向けた授業研究の理論①②と実践例による検討：コルトハーヘンの教師教育学の理論を学び、それを基に授業研究のあり方を考える。また授業研究会の事例検討を行う。		○	○
6	対話型模擬授業検討会の取り組みの検討	○	○	○
7	教材研究と指導案検討：教科専門の教員との打ち合わせを踏まえ、模擬授業の指導案の検討を行う。また模擬授業に応じた授業検討会の進め方などを検討する。	○	○	
8・9	模擬授業と相互検討会①～②：2教科の模擬授業を実施し、対話形式の検討会を行う。	○	○	○
10	対話型模擬授業検討会の振り返り：2回の検討会を振り返る。	○	○	○
11～14	模擬授業と相互検討会③～⑥：6教科の模擬授業を実施し、対話形式の検討会を行う。	○	○	○
15	本授業のまとめ：授業研究に関する理論と模擬授業研究会を振り返り、よりよい授業研究の方途を探る。	○	○	○

事前事後学修：事前学修としては、講義内容に関する文献等を熟読し、学習指導案の作成を行う。事後学修では、実施された講義内容の関連文献等を復習したり、模擬授業を振り返り、自らの教育活動の改善を考え、整理したりすることを期待している。

テキスト・参考書等：文部科学省の学習指導要領および学習指導要領の解説とともに下記のものを提示している。

・フレット・コルトハーヘン著、武田信子監訳『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社、2010年。

・渡辺貴裕『授業づくりの考え方—小学校の模擬授業とリフレクションで学ぶ』くろしお出版、2019年。

②成果と課題（受講学生の学びから）

本科目の受講学生は、6名（現職院生：4名、学卒院生：2名）であった。受講後の感想・意見として下記のような記述が見られた（表4）。

表4 院生の受講後の感想・意見（2名の記述を抜粋）

院 生	感想・意見
院 生 A (現職)	授業検討会のあり方：（前略）6人の受講者と先生方で色々と話し合えた時間は貴重であった。<u>学芸大の方からの刺激もたくさん受けて、とても良い環境の中で、授業を受けることができた。</u>私は、それに加えて、例えば、前期の「学習指導と授業デザイン（火・2）」、後期の「学校カリキュラムのデザインと評価（月・3）」「授業における評価の基準作成理論と学力評価法①（火・2）」の授業での学習が役に立ったと思う。<u>様々な課題がループしあって、いろんな発見があつて面白かった。</u>（筆者：授業科目等加筆）<u>あえて、来年度への改善をあげるとしたら、模擬授業をもっと早い段階で行うこと（今回は8回目スタート）。それまでが、とても長く感じた。理論と実践を交互に取り入れた方が、照らし合わせながら改善して行きやすいのではないかと考えた。</u>（b） その他：来年がオンラインでなくとも、Teamsでの振り返りはぜひ入れてほしい。（中略）授業者も素朴な思いを記入できた方がよく、また、コア・リフレクションの問いを使った振り返りは、今回の形式のようなレポートでの提出が良いと思う。
院 生 B	授業検討会のあり方： 授業初回での自分の「授業研究」のイメージは、教師主導の授業のあり方を考

(現職)	え、子どもたちをどのように導くかを検討するものだと考えていた。そのような考えから、教師が授業を操作し、導かなければならないという思い込みが生じていた。しかし、兵教大対話型模擬授業検討会を創り上げていく中で、自分の考えが大きく変化した。そのきっかけとなったのが、少人数での対話である。(中略)しかし、少人数対話では、互いに質問を投げかけ、受け答えしていくうちに化学反応を起こし、自分の枠の外にあるものに気が付くようになった。また、「よい教育とは」「よい教師とは」「よい授業とは」という問いを意識することで、自分自身がもつ答えは、たくさんある答えの中の一つではないのだということが見えてきた。(中略)最後の授業で私が答えた「授業研究」のイメージは、「思い込んでいる時には見えないが、問い直すと見えてくるようになる」である。本質の問い方について学べたこの経験は、これからの教師人生において大きなターニングポイントになったと考えている。(後略)。
院 生 C (学卒)	授業検討会のあり方： 正直なところ、(中略)模擬授業をすることでこの授業の趣旨やコルトハーヘンの理論、検討会についてなど、一気に様々な理解が深まり、とても楽しかったです。みなさんと対話することでいろんな考えが聞けて楽しつつも、授業研究を深まらせることができ、とても素敵な検討会だったと思います。 <u>ICT 機器をふんだんに利用するのも効率よく、時代の流れに合わせるやり方で、みなさんのご提案は本当にすごいなと思いました。最初はついていけなかったものの、理論を学んでから実践するという方法はやはり重要だと思いました。</u> (中略)先生が文献を用意してくださり、読み合わせの機会があったからこそ授業研究の理論についての学びが深まったと思いました。そして、理論を踏まえながら検討会を改善しようとしたからこそ質の高い検討会を作れたのだと思います。

授業研究に関する理論を学ぶ機会

院生 C (学卒) の感想 (下線部 a) に見られるように、コルトハーヘンの理論等の授業研究に関わる文献の読み合わせの機会は、実際の模擬授業を取り組む際には、大変意義深いととらえていることが分かった。院生 A (現職) は、その意義を認めながらも「・・・理論と実践を交互に取り入れた方が、照らし合わせながら改善して行きやすいのではないかと考えた。」(下線部 b) という改善案の提示が見られ、今後の展開に検討の余地が残されている。

模擬授業・事後検討会への取り組み (ICT 活用・協働性)

全員が模擬授業を提供し、その事後検討会として ICT が積極的に活用された。またその延長として、東京学芸大学の学生参加による模擬授業検討会も行われた。これらの取り組みに対して、院生 C (学卒) は、ICT を積極的に活用したことを高く評価していることが分かった (下線部 c)。また、院生 A (現職) は、東京学芸大学とのコラボを評価するとともに (下線部 d)、その他で述べるように、Teams の積極的活用を支持していた。今後も、これらの点を留意しつつ、模擬授業形態や授業後の課題提出に伴った ICT 活用を位置付けておく必要がある。

協働的な省察と自己の成長

院生 B (現職) の記述から、本授業の前後の「授業研究」のイメージの変容が語られ、その中で、コアクオリティの接近という面もふれられていたことが分かる。少人数での対話形式への参加によって、院生 B (現職) 自身が自らの成長変化を見出し、その過程の結果として「本質の問い方について学べたこの経験は、これからの教師人生において大きなターニングポイントになった」と記している。授業研究における「本質への問い」を焦点づける設定は、今後も重要な点であることがうかがわれる。なお、コアクオリティについては、今後、授業科目群で扱い、検討会における対話の質を一層向上させることも考えていく。

他の科目における学びとの関連と力量形成

院生 A (現職) の記述 (下線部 d) に見られるように、前期で履修した「学習指導と授業デザイン」や後期履修の「学校カリキュラムのデザインと評価」「授業における評価の基準作成理論と学力評価法」といった他の科目での学びが本授業で活かされたと捉えていたことが分かった。「様々な課題がループしあって・・・」という院生 A (現職) の表現のように、連動した授業内容や授業体制も一定評価された点を今後も丁寧に確認し、その結果としての力量形成を具体化する必要があると考える。

(4) 学校カリキュラムのデザインと評価(後期:専門科目)

①授業の概要

授業のテーマ及び到達目標:各校の自然的・社会的地域環境や児童・生徒の実態等に即して作成される学校カリ

キュラムのデザインと評価およびマネジメントに関する理論及び方法・技術の習得を目標とする。教育現場の豊かな発想と理論に基づく学校カリキュラムのデザインと評価およびマネジメントを学校現場で進めていく力量形成をめざす。

授業内容: 教職大学院の共通基礎科目である「特色あるカリキュラムづくりの理論と実際」での学修内容を前提として、「特色あるカリキュラム開発」のためにカリキュラム・マネジメントをいかに進めていくか、さらにその中核となるカリキュラム評価の手法の修得をめざした。その際、理論的追究と実際に行われた実践の検討をサンドイッチ構造にすることで、理論と実践の融合を目指した。本科目では、カリキュラム論の性格（教育内容の系統性・関連性の強調、学校全体で長期的に取り組む必要性の強調）から、とりわけ本研究の「c：他者と協働的に」と「d：長期的・多角的な視点を持って」、さらにはカリキュラム・マネジメントの中核としてのPDCAサイクルの効果的運用の観点から「Ⅰ. 設計」「Ⅱ. 実践」「Ⅲ. 省察」「Ⅳ. 改善」の効果的運用がキーワードとなるものとなった。（表5）

表5 学校カリキュラムのデザインの授業内容と重点事項

回	授業内容	重点事項					
		c	d	I	II	III	IV
1	オリエンテーション						
2	カリキュラムとカリキュラム・マネジメント： カリキュラムとカリキュラム・マネジメントについて、基礎的事項（意義と編成条件や編成原則等）の整理を行う。	○	○	○	○	○	○
3	カリキュラム・マネジメントの手法①： カリキュラム・マネジメントの3つの側面を確認した上で、第1の側面としてPDCAサイクルに基づくマネジメント理論について学ぶ。 具体的には、タイラー（Tyler）、ブルーム（Bloom）、スキルベック（Skilbeck）の3氏の所論を検討することを通じて、学校カリキュラム開発の原則とされるPDCA（Plan-Do-Check-Act）を支える理論の歴史的展開を学ぶ。			○	○	○	○
4	カリキュラム・マネジメントの手法②-1： カリキュラム・マネジメントの第2の側面として教科横断的課題追求についてなぜ教科横断的視点が盛り込まれたのかを「目指すべき学力像の変化」との関連で学ぶ。	○	○	○			
5	カリキュラム・マネジメントの手法②-2／カリキュラム・マネジメントの実践事例①： カリキュラム・マネジメントの第2の側面として教科横断的課題追求について先行実践（兵庫教育大学附属中学校のクロスカリキュラム）から学ぶ。	○	○	○	○	○	○
6	カリキュラム・マネジメントの手法③： カリキュラム・マネジメントの第3の側面として物的・人的資源の有効活用について先行実践から学ぶ。 カリキュラム・マネジメント重視の背景①： 特色あるカリキュラムのデザインやカリキュラム・マネジメントが近年求められるようになった背景（特に求められる新入社員像の変化）について学ぶ。		○	○			
7	カリキュラム・マネジメント重視の背景②： 特色あるカリキュラムのデザインやカリキュラム・マネジメントが近年求められるようになった背景（特に政治・経済的背景：「規制緩和」）について学ぶ。		○	○			
8	オランダの教育制度概要： 憲法で「教育の自由」が保証されているオランダの教育制度から、特色あるカリキュラムを実現しうる制度のあり方を考える。	○	○	○	○	○	○
9	オランダのダルトンスクールのカリキュラム設計・評価： オランダのダルトンプランのカリキュラムを基に、学校全体で学び方や共働きのスキルを	○	○	○	○	○	○

	育成するためにどのようなカリキュラムが設計され、どう評価がなされているのかを検討する。						
10	カリキュラム評価, カリキュラム・マネジメントの実践事例②－1：実際の事例（京都市立高倉小学校）を実践者（岸田）自身の語りから、カリキュラム評価やカリキュラム・マネジメントのあり方について学ぶ。	○	○	○	○	○	○
11	カリキュラム評価, カリキュラム・マネジメントの実践事例②－2：（前時の続き）実践事例についての感想・疑問の交流。	○	○	○	○	○	○
12	カリキュラム評価のアプローチ①：ゴールフリー評価，目標に準拠した評価といったアプローチを学び，カリキュラム評価としての逆向き設計論について検討する。					○	○
13	カリキュラム評価のアプローチ②：チェックリストやモデル図を使った事例などカリキュラム評価の具体的な手法について学ぶ。					○	○
14	カリキュラム・マネジメントやカリキュラム評価の交流会：本授業で学んだ手法等を用いて自校もしくは自身が作成したカリキュラムの評価・分析を行ったものを持ち寄り，互いに交流を行う。	○	○	○	○	○	○
15	授業のまとめと振り返り：教員側から授業で行ったことのまとめを行ったうえで，受講者自身が書き込んだSS（1枚物の振り返り票）への書き込み内容を，自分の視点から再構成し，発表・共有する。	○	○	○	○	○	○

事前事後学修: 1 授業について 2 時間は，授業の振り返り（SSへの記入と提出）《事後学習》を行うとともに，授業内で示す参考文献の参照や課題の準備《事後学習》を行ってください。

テキスト・教材・参考書等:

【テキスト】田中・水原・三石・西岡『新しい時代の教育課程〔第4版〕』有斐閣，2018年。

【教材・参考書等】田中耕治編『よくわかる教育課程 第2版』ミネルヴァ書房，2018年。

②成果と課題

成果

教員からの情報提供とそれを基にした受講生の協働作業によって受講生に以下のような学びが得られたことが，彼らの振り返りシート（各回）や制作物（第14回）および振り返りシートのまとめ（第15回）から読み取れた。

- ・教科内・教科間連携（＝教科横断的取り組み）は，教育内容間の連携であるが，それを実体化させるためには，組織として教師（担任）間の連携が必要であるという認識を得られた。（c, d）
- ・competencyとしての「新しい資質・能力」は，すべての教科の土台として，また応用として，長期的のスパンで養われなければならないという認識を得られた。（d）
- ・理論的視点，日本教育的視点とワールドワイド的視点（オランダのカリキュラム・マネジメント），小学校と中学校の実践報告とで「多角的な視点」を得られた。（d）
- ・小学校と中学校の実践レポートを聞くことによって，具体的な「設計→実践→省察→改善」の先進事例を検討できた。（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ）
- ・カリキュラム評価の3つの手法を知らせることができ，それに基づいて，現任校のカリキュラム・マネジメントへの省察と改善案作成を行うことができた。（Ⅲ，Ⅳ）

課題

一方で，以下の3点が課題として読み取れた。

- ・共通基礎科目との連携がうまくできなかったことにより，カリキュラム・マネジメントに関する基礎的な知識の理解定着に課題が残った。
- ・教科を越えた連携の一手段として「兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会」は有効なものになり得る(c)にも関わらず，この点が受講者にしっかり自覚できるような仕掛けが不十分であった。
- ・実践レポートについて，総花的な振り返りにとどまることなく，より「焦点化」された省察と改善

につなげられる余地がある。

(5)まとめ

以上、4つの授業科目における成果と課題を整理すると以下のように図示できる。これらを踏まえ、次章で開発した科目群を提案する。

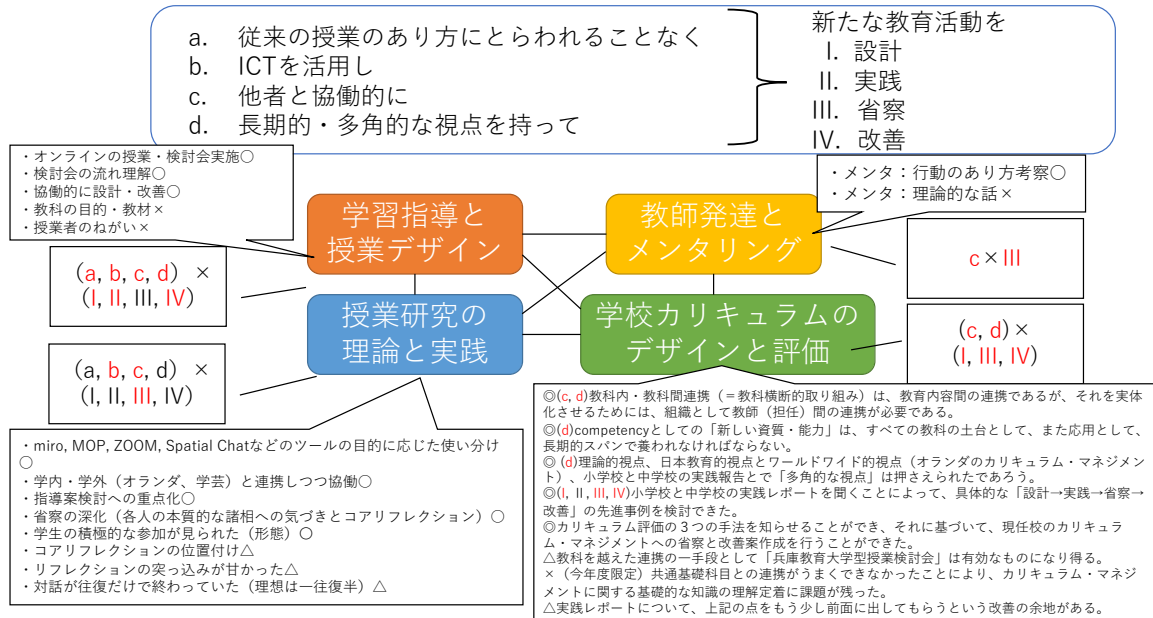


図2 授業科目群案に基づく取り組みの成果と課題

4. 成果と課題

(1)開発した科目群

本研究を通じて、開発した科目群の内容は図3の通りである。今年度の取り組みの課題等をふまえた改善点を吹き出しに示している。4つの科目に関わる大きな変更点としては、本研究を通じて開発された2020年版兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会を軸に据えること、その際に指導案検討を位置付けること、コア・リフレクションを取り入れることなどが挙げられる。開発された兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会については、次節で説明する。

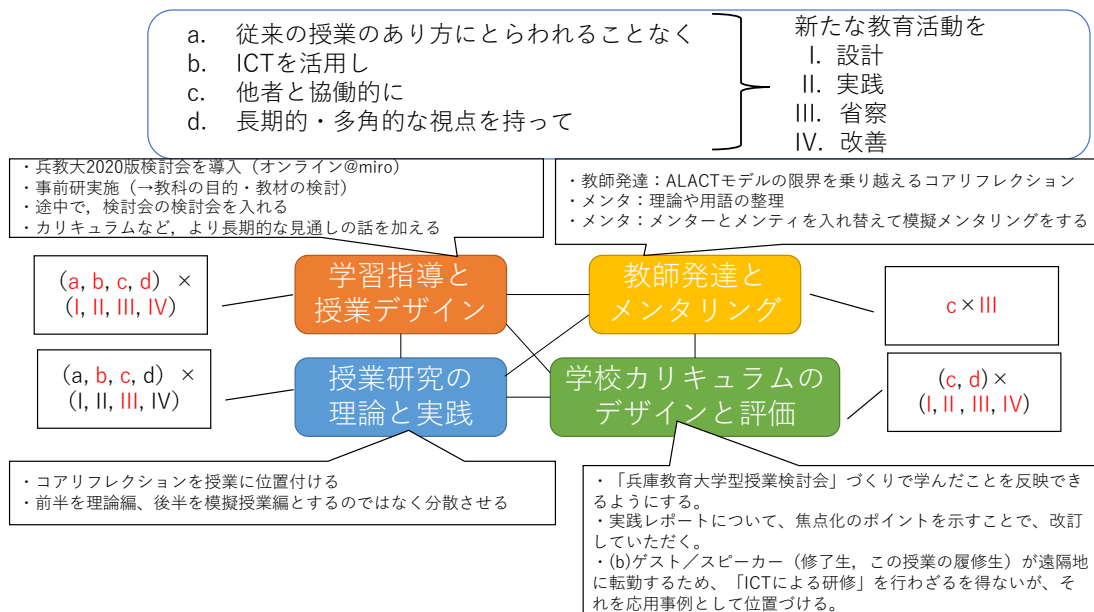


図3 開発した授業科目群

(2)兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会の提案

本研究を通じて開発された兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会は図4の通りである。なお、図は授業を受講していた院生が作成したものである。

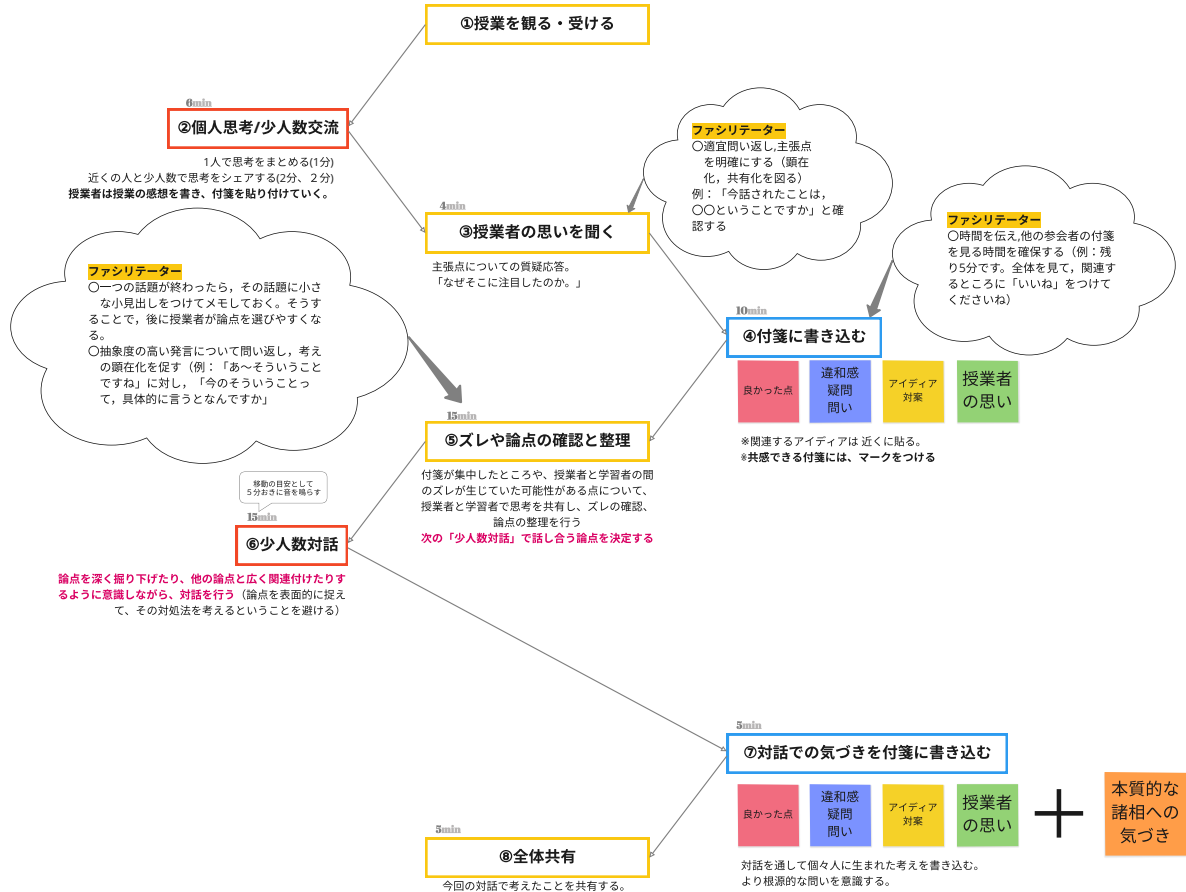


図4 兵庫教育大学版対話型模擬授業検討会

主な流れは、次の通りである。最初に①模擬授業が実施される。検討会の最初は②個人で思考をまとめ、それを近くの人と少人数で交流する。この時、学習者として授業を振り返り、交流する。その上で、③授業者の思いを聞く。授業者は事前に、模擬授業でこだわった箇所を主張点として設定しておく。④それぞれがmiroというオンライン上のホワイトボードで、付箋に書き込みをする。この際、学習者として何を行い、考え、感じ、欲したかを意識して書き込みをする。内容に応じて良かった点(ピンク)、違和感・疑問・問い(青)、アイデア・対案(黄)、授業者の思い(緑)で付箋の色分けを行う。⑤書き込まれた付箋に基づいて、全体で話し合う。この際、授業者と学習者の間に生じているズレを見出し、深めたい論点を決定する。アイデア・対案についてはここでは触れない。後から授業者が参考にできるようにそのまま置いておく。⑥論点に基づいて、少人数対話を行い、なぜズレが生じていたのか、ズレの背景にある問題は何かなど、ズレに関する認識を深める。最後に、⑦深めた内容に基づき、参加者全員が自分の「本質的な諸相への気づき」を言葉にしてオレンジの付箋に書き込み、⑧全体で共有する。

一連の流れをALACTモデルと対応させると、①が第1局面の授業場面、②～⑥が第2局面の行為の振り返り、⑦⑧が第3局面の本質的な諸相への気づきである。これらを踏まえて授業者が第4局面へ進む際には後から振り返って黄色い付箋に書かれたアイデア・対案を参考にすることができる。

兵庫教育大学の対話型模擬授業検討会の特徴としては、時系列に沿って授業者・学習者がDTFWを出すこと、ただしあえてDTFWを明示しないこと、思考・対話形態を柔軟化すること(個人思考、少人数

対話，一斉での話し合い），一人ひとりの「本質的な諸相への気づき」の表出を取り入れることが挙げられる。これにより，授業者のより深い省察を大切にしつつ，参加者全ての学びにつながる検討会となったと考えられる。

(3)最終成果発表会：日蘭同時開催のwebinarの実施

ここまで述べてきたような一連の成果は，2021年3月4日に日蘭同時開催のwebinarで報告された。Webinarでは，まず，東京学芸大学の渡辺および教職大学院の院生が，東京学芸大学で開発された対話型模擬授業検討会についての報告を行った。対話型模擬授業検討会が従来の授業検討会の「常識」にいかにか挑むものであるかが示され，その起こりと発展，院生らが経験する変容，学校現場との連携の実際について述べられた。あわせて，院生成成による対話型模擬授業検討会の紹介動画が上映された。動画のURLは次の通りである（<https://youtu.be/fqlMzS1Me1M>）。次に，兵庫教育大学の奥村および教職大学院の院生が，兵庫教育大学で開発された対話型模擬授業検討会を中心に本研究成果の報告を行った。内容は，本報告書でこれまでに述べてきたような内容である。最後に，オランダのMarnix Academieのロフテンベルグらが東京学芸大学および兵庫教育大学の取り組みへのコメントや，Marnix Academieでの取り組みの紹介を行った。コメントでは，次の3点が指摘された。1点目は，模擬授業という状況設定に関して，どこまで真正性を担保することができるかという点である。2点目は，1点目と関わるが，実際の子どもではなく，こういった行動をすべきか分かっている院生が学習者役を行うことで，どの程度本当の子どものような学習者の視点が得られるのかという点である。あえて院生が模擬授業を実施することの意味が問われた。3点目は，授業という営みを授業者，学習者，教育内容，学習グループという4つの視点で捉え直す必要があるのではないかという点である。教育内容の検討を位置付けること，また本来は子どもたちである学習グループを視野に入れることが提案されているといえる。これらは模擬授業という営みの限界を指摘するものであり，本研究の今後の課題であるといえる。

5. おわりに

本研究は，兵庫教育大学大学院学校臨床科学コースの専門科目の一部として，教職大学院におけるSociety5.0時代における教師の力量形成に資する授業科目群を開発することを目的としていた。

その結果，「学習指導と授業デザイン」「教師発達とメンタリング」「授業研究の理論と実践」「学校カリキュラムのデザインと評価」という4つの科目からなる科目群を開発することができた。特に，科目群の中で軸となる対話型模擬授業検討会については，兵庫教育大学版を一層改善することができた。こうした複数の科目を連携させた包括的視点での力量形成は，Society5.0時代に求められる力量を育成していく上でふさわしい取り組みであったと思われる。こうした取り組みは世界的に発信し，フィードバックを得ることもできた。

なお，本研究で開発した科目群を通じて，本研究がねらった力量形成が院生たちに実現されたかについては，今後，学会発表や学術論文に投稿することを通じて明らかにしていきたい。

引用文献

- ・石井英真編著『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社，2021年。
- ・コルトハーヘン，F.（編著）（武田信子監訳）『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社，2010年。
- ・中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」2015年12月21日。
- ・中央教育審議会「教員養成部会審議まとめ」2020年7月17日。
- ・日立東大ラボ編『Society 5.0—人間中心の超スマート社会』日本経済新聞出版社，2018年。
- ・山辺恵理子「コルトハーヘンのリフレクションの方法論」坂田哲人・中田正弘・村井尚子・矢野博之・山辺恵理子『リフレクション入門』学文社，2019年。
- ・渡辺貴裕・岩瀬直樹「より深い省察の促進を目指す対話型模擬授業検討会を軸とした教師教育の取り組み」『日本教師教育学会年報』第26巻，pp.136-145，2017年。